

二〇一八年六月二五日

ペディキュアはコバルトブルー梅雨籠  
小流れにさざ波の立つ目高かな  
板塀の続く社家町緑立つ  
日本一低いといはれ山開き

もとこ  
宏 虎  
菜 々  
治 男

二〇一八年六月一四日

きつかけは紫陽花の色立ち話  
梅雨晴へ車吐き出す連絡船  
鐘の音の余韻嫋々青葉山  
岩壁を攻め上るごと蔦青葉

よう子  
やよい  
せいじ  
ぼんこ

二〇一八年六月一三日

畑継ぎし彼が西瓜を抱へ来し  
山壁の斯く濃くなりし大夕焼  
仏壇にもしび色の枇杷一つ  
めつぶしの西日信号待ちの吾に

なつき  
明日香  
なつき  
ぼんこ

二〇一八年六月一二日

梅雨の鬱吹き飛ばさんと髪染めに  
青楓樹下は子どもの秘密基地  
紫陽花の曼荼羅なせる寺苑かな  
山頂を縦横無尽つばくらめ  
身をよじりつつ右左草刈女  
これよりは立入禁止蛇苺

菜 々  
なおこ  
よう子  
せいじ  
なつき  
更 紗

二〇一八年六月二一日

古宮の巨木を仰ぐ樹下涼し  
梅雨雲が天辺覆ふ神の山  
旅涼し津軽なまりのバスガイド  
写し絵の父に遺愛の庭の薔薇  
先代の遺愛の蔵書晒しけり  
濃き屯淡き屯や菖蒲園  
成り行きに任すほかなし髪洗ふ  
夕風が匂ふ水面や田植了  
青時雨鎌倉道の切通し

さつき  
明日香  
はく子  
更 紗  
菜 々  
あさこ  
たか子  
宏 虎  
愛 正

二〇一八年六月一〇日

夏野菜とれとれといふお裾分  
初なりのトマト仏の先代に  
二〇一八年六月九日

満 天  
菜 々

ベランダは満艦飾や梅雨晴間  
沖合の点景となる潮干狩  
山肌をなほ濃くしたる緑雨かな  
湧き出づる清水や銀紙揉むごとく  
溜め池の水満々と緑濃し  
喉ごしの易し見舞ひの初西瓜

満 天  
さつき  
更 紗  
更 紗  
明日香  
たか子

毎日句会みのる選・二〇一八年六月一八日